舞踊人類学研究の国際動向

遠 藤 保 子

Panorama of dance anthropology

Yasuko Endo

Abstract

Dance anthropology or the anthropology of dance has typically focused on the study of dance in non-Western, nonindustrialized or nonliterate societies. The discipline has changed, however, not only in terms of the types of cultures and societies it concerns itself with, but also in terms of its perspective on the subject matter. Through a careful cross-national review of the research literature, it is suggested that there have been three developmental stages in dance anthropology. The first stage was period of establishment. Early anthropologists, such as E. B. Tylor referred to dance activity by the evolutionary framework of the 19th century. In the early 20th century, under the direction of F. Boas, anthropologists in the US studied Native American cultures including the types and functions of dance in that society. Also in this period, British anthropologists like A. R. Radcliffe-Brown made contributions to the understanding of the value of dance in society. The next stage was the period of development. The first full articulation of dance anthropology is found in *Panorama of Dance Ethnology* by 'the mother of dance ethnology', G. P. Kurath (1960). Kurath discussed dance ethnology from three main standpoints: 1) common problems of choreology and anthropology, 2) choreographic procedures, 3) practical considerations. During the 1970s, J. Kealiinohomoku, A. P. Royce, A. L. Kaeppler, J. L. Hanna pursued a more anthropologically-oriented direction. Their subdiscipline has been termed 'dance anthropology', rather than dance ethnology, because it was informed by and addressed to prevailing anthropological theory. These researchers have published many papers dealing with the theory and methods of dance methodology. The final stage was the period of expansion. In 1979 J. L. Hanna used V. Turner's poststructuralist framework to analyze the Ubakala dance-plays as mediators of Paradox in Nigeria. In Japan, from the 1970s dance researchers interested in anthropology gathered and analyzed data about the functions and structures of dance in Asia and Africa.

Key words: dance anthropology, cross-national studies, new areas of inquiry

(Japan J. Phys. Educ. 44: 325-333, July, 1999)

キーワード：舞踊人類学，研究の国際動向，新しい研究領域

1. はじめに

近年においては，医療人類学，映像人類学，都市人類学，演劇人類学など，さまざまに形容され

た文化人類学が登場している。これは文化人類学が，一方では熟年期をむかえ解体の危機を内包しているともとらえられるが，他方ではそれまでの文化人類学を克服しようとする新しい胎動とも考えられる。こうした胎動は，スポーツ分野にも影響を与え，スポーツ人類学という言葉はもちろ

のこと、本稿でとりあげる舞踊人類学という言葉も誕生している。

舞踊人類学は、英語でいえば dance anthropology または anthropology of dance である^{注1)}。舞踊人類学という表現が使われたしたのは、アメリカ合衆国(以下アメリカ)における舞踊の研究者、たとえば Kealiinohomoku, Royce, Kaeppler, Hanna などが、人類学の理論を本格的に学び、1970年代にはそれまで表現されていた民族舞踊学 dance ethnology よりも舞踊人類学専攻といったほうがより適切だったからである (Quigley, 1998)。舞踊人類学の典型的な研究対象としては、非ヨーロッパ社会あるいは非工業化社会または無文字社会における舞踊を取り扱うことが多かった。しかし、今日のアメリカにおける舞踊人類学では、このような社会の相違による舞踊研究ではなく、舞踊という研究対象そのものを人類学的に考察すべきだという考えから、クラシックバレエ (Kealiinohomoku, 1983) やコンタクトインプロビゼーション (Novack, 1990) なども研究対象にされたり、あるいはカルチュラル・スタディーズに代表されるような新しい研究ともかかわって、舞踊に関する研究が、多彩に展開されている^{注2)}。

さて、舞踊人類学よりも古い言葉である民族舞踊学は、アメリカの研究者が、舞踊の文化変容について考える研究分野であった。したがって、アメリカにおける民族舞踊学とは、民族音楽学と同じようにアメリカの先住民や移民集団や非ヨーロッパ社会の舞踊に関する研究、あるいは民俗学と同じように伝統的な農村社会と新しい都市社会における舞踊の比較研究などであった。一方、ヨーロッパにおける民族舞踊学 ethnochoreology は、民俗学と音楽学の分野から発展したため、研究者は自国の伝統に関する研究から始まり、今日では移民集団と都市の現代舞踊の研究をも含むものに広がってきている (Youngerman, 1998)。

このように、欧米における舞踊人類学と民族舞踊学という言葉は、意味する内容が微妙に異なっている。そこで、本稿では舞踊人類学という言葉

え、対象としてはアメリカとヨーロッパの研究、それにそこから派生した研究に限定し、①草創期の舞踊人類学的研究、②確立期の舞踊人類学研究、③展開期の舞踊人類学研究 という3点から舞踊人類学研究の国際動向を探りたい。

2. 草創期の舞踊人類学的研究

草創期とは、具体的には19世紀後半から第2次世界大戦後くらいまでを想定している。初めの頃の人類学的舞踊の記述は、アジアやアフリカに行った旅行者や探検家、キリスト教の伝道者、アフリカの奴隷貿易商人など、アマチュアの人々が、ヨーロッパの舞踊を基準にしつつ各地のさまざまな舞踊を「プリミティブ」な舞踊としてとらえ、人々がどのように踊るのかを記録している。一方、近代イギリス人類学の創始者の1人、タイラー Edward Burnett Tylor なども文明社会と「プリミティブ」な社会との対比によって舞踊を検討している。タイラーは、ダーウィニズムの洗礼を受け、当時全盛であったスペンサーの進化論に基づき、現実にある文明の違いは発展段階の差によるものと考え、さまざまな文化をヨーロッパ文化にどのくらい近いのか遠いのかにより、進化の段階はどの程度かを考える進化論者であった。その立場から宗教、娯楽、生活技術などを考察し、舞踊についても言及し、あくまでその社会を知るための研究手段として舞踊を検討したのであった。

2.1 アメリカの人類学と舞踊人類学研究

20世紀初頭になると、アメリカ人類学の父であるボアス Franz Boas に導かれた多くの人類学者が、舞踊が儀礼の中で重要な位置を占めているアメリカ先住民の社会について研究を行った。ボアスは、それまでの進化主義的なヒエラルキーの中に単一が存在であった文化を、人類学的比較研究が可能な複数の並列的な文化としてとらえた。つまり、文化相対主義の考え方であり、人類進化史として文化をとらえるより、個別の文化や社会を重視した。ボアスにとって文化とは、独立に発生し、発明されるものではなく、伝播した文化の諸要因が収れん・統合され、複合される過程であ

った。これに対し、その時期のアメリカ人類学のもう一方の雄であったクローバー Alfred L. Kroeber は、歴史の中の個人の役割をより少なくする視点にたった理論を発展させた。それは人間の文化とは、単なる生物的なまたは有機体的なものを超える何かがある、つまり「超有機体」ととらえるものである。ボアスは言語・観念・意識の側面に関心をもち、クローバーはどちらかといえば自然環境・技術・制度の側面に関心があった（船曳建夫, 1988, p. 25）。ボアスの関心からは文化とパーソナリティの研究が展開され、アメリカ先住民の踊りをディオニソス型とアポロン型にわけて論じた、ベネディクト Ruth F. Benedict などの著名な研究者に引き継がれる。いずれにしても、アメリカの文化人類学にとって重要な概念は、「文化」であった。そして、タイラーと同様ボアスの研究においても、社会を理解するために舞踊を検討するという、舞踊の研究は主たる研究目的ではなかったことが共通している。

2.2 ヨーロッパの人類学と舞踊人類学研究

イギリスの人類学が、対象としたのは「社会」であった。イギリス社会人類学をさかのぼって行くと、最後はアメリカ人類学と同じ源泉にたどりつくといわれるが、イギリス人類学の創始者としては、マリノフスキー Bronislaw K. Malinowski とラドクリフ＝ブラウン A. R. Radcliffe-Brown とされている。マリノフスキーは、タイラーやボアスの影響を受けながら、文化を複合的な全体と考え、ニューギニア東方海上のトロブリアンド諸島で現地調査に基づく人類学研究を提唱・実践した。ラドクリフ＝ブラウンは、社会的な規範とその制度、法と道徳などを社会構造とし、その中で個人の適応行動のメカニズムとその機能を文化と考えた。ともに、文化や社会は全体としての機能を果たしながら存続しているとする機能主義者として有名である。特にラドクリフ＝ブラウンは、晩年個人の行為より構造の優先あるいはその規定性を重視したことから、構造主義立場にたつと主張している。（村武精一, 1991, p. 8）補足すると、彼の立場は、フランスの構造人類学者レヴィ

＝ストロースの象徴構造論とは異なる。ラドクリフ＝ブラウンは、インド洋のアンダマン島の舞踊について、人々は楽しいから踊り、踊ることによって、解放感を味わい自分の価値感を高めるなどと検討している。この研究の特徴は、舞踊を美的な側面だけではなく社会的有用面に関しても評価していることがあげられる。その社会とは、さまざまな構成要素から成り立ち、それらが関連しあい、社会全体の相互連関や全体の統合性を問題にするという社会静態的にみる立場で考えられている。社会のとらえ方には、歴史的には静態的立場と動態的立場、つまり社会の全体的な変動やその歴史的発展をダイナミックにとらえる立場がある。構造主義的考え方では、社会や文化の動態（変化）をとらえられないという欠陥がある。そして、社会動態の立場にたった舞踊人類学研究は、70年代後半を待たなければならない。

一方ドイツでは、1933年、音楽研究者ザックス Curt Sachs が、その当時としては画期的な『世界舞踊史』を出版し、世界における舞踊の歴史を概観しつつ、さまざまな舞踊の比較検討を行っている。この当時のドイツでは、文化圏理論が確立され、ザックスもこの理論の影響下にあった。文化圏説とは、文化の歴史的伝播は、1つの文化現象あるいは文化要素とみるのではなく、各種の文化要素が相関的に結合しているもので、この一群の文化要素の分布領域を指している。ザックスの研究で評価される点は、グローバルな規模で舞踊の記述を行い、それを文化的な要素とのかかわりで分析したことである。しかしながら、考え方が西洋中心であること、取り上げられた資料が世界の舞踊を網羅してはいないこと、なおかつ系統的ではないことなどから、今日ではこの著作の専門書としての価値には限界がある。

3. 確立期の舞踊人類学研究

確立期とは、具体的には第2次世界大戦後から70年代くらいまでをさしている。しかし、この区分はあくまでも目安であり、必ずしも明確に区切られるものではない。未開社会の研究として始まった人類学は、大戦後その研究対象が拡大さ

れてくる。アメリカでは、中米社会や未開と文明の中間領域としての民俗社会や農村社会の研究がよりいっそう行われ、イギリスでは、植民地としていたアフリカの部族社会の機能主義的研究とともに、アフリカ都市社会の研究が開始された。それと平行して、人類学を専攻した研究者によって舞踊人類学も、本格的に研究されるようになる。

3.1 アメリカの舞踊人類学

50年代から60年代にかけての文化人類学は、アメリカ主導のかたちで集大成されつつあり、東海岸にはボアス（コロンビア大学）の弟子たちの系譜、西海岸にはクローバー（カリフォルニア大学バークレー校）と弟子たちの系譜があり、それに訪米したマリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンなど、ヨーロッパの影響を受けながらアメリカの文化人類学が確立されていった（米山俊直，1988, p. 15）。

1960年、舞踊人類学のパイオニアといわれるクーラス Gertrude P. Kurath が、「ダンスエスノロジーのパノラマ」という論文を発表した。タイトルこそ民族舞踊学ではあるが、論文ではヨーロッパ、アメリカ、アジア、南米、アフリカなど世界のさまざまな地域の舞踊を検討対象としていることから、クーラスのいう民族舞踊学は、今日のアメリカにおける舞踊人類学の意味とオーバーラップすると思われる。（ただし、クラシックバレエや日本の能はダンスエスノロジーでは取り扱わないという点が異なる。）この論文によってはじめ、舞踊を中心的な研究テーマとする舞踊人類学研究の国際動向が概観された。理論、方法、研究体制を含む総合的に考察された論文は、舞踊人類学研究には欠かすことができない。そこで、その内容をかいつまんで紹介したい；

- ① 舞踊学と人類学における共通の課題…社会的関係（個と集団、女性と男性の役割、儀式的、経済的などの組織）、舞踊にかかわる課題（文化変容、文化の連続性、文化伝播の問題）、関連諸科学との検討（心理学、言語学、考古学、音楽学）など。
- ② 舞踊分析の手順…分析のためのレコーディ

ング法とラバノーテーションや他の記譜法によるスタイル分析など。

- ③ 研究の実際…レコーディングのためのテクニック、舞踊人類学者のトレーニング法、チームワークの必要性など。

研究者であり、舞踊家でもあったクーラスは、イエール（Yale）大学では芸術学や演劇学を専攻したが、本格的な人類学の理論を学んではいなかった。クーラスの研究テーマは、文化の伝播や文化変容などがあげられ、前述したボアスなどの影響が読み取れる。クーラスは、アメリカの舞踊人類学研究の発展に大きく貢献したことから、「民族舞踊学の母」とも称されている（Kealiinohomoku, 1998, p. 77）。

クーラス以後、多くの研究者が人類学を専攻し、舞踊人類学の論文を発表していく。例えば前述した研究者であるケアリノホモクは、ホピとポリネシアの舞踊を対象に通文化的な考察をし（1967）、1976年「アフリカとアフロアメリカンの身体運動の構造連関における舞踊の比較検討」では、グラフノーテーション（ラバノーテーションを改善した記譜法）を用いてアフリカ（ナイジェリア）とアフロアメリカンの舞踊を比較し、同年『人類学研究の理論と方法』でインディアナ大学の学位を取得した。博士論文では、人間の行動としての舞踊は、生物学的心理学的枠組の中で、しかも文化的に変化するものとして研究されなければならない、人間の行動を決定するのはバイオリズムが最も重要な要因であること、そして比較の方法としては、共時的比較と通時的比較があり、比較内容としては舞踊、ジェスチャー、音楽、言葉の4点に関する共通点と相違点を明確にすること、などが報告されている。研究指導には著名な音楽人類学者メリアム Alan P. Merriam があたっているが、研究内容からボアスやクローバーの影響も読みとれる。特記すべきは、グラフノーテーションによってそれまで以上に客観的な舞踊分析を可能にしたことである。と同時にそれは、無意味な動作分析につながる危険性もある。なぜなら、舞踊の動作を時間毎に区切ると、調査地の人々が考えているひとまとまりの動作とは異なる

場合が生じるからである。また Royce は、1977 年『舞踊の人類学』を著し舞踊人類学的研究の総括を行った。Royce の研究では、対象とされる社会があまりに限定的であり、先行研究の重要な概念記述が不明確であるものの、舞踊人類学とは何かを体系的にまとめられた書物として、あるいは舞踊人類学の入門書として評価される。さらに Kaeppler は、言語学（ソシュールやチョムスキー）の構造分析を援用し、1967 年『トンガ舞踊の構造』でハワイ大学の学位を取得している。Kaeppler は、トンガの踊り手の身体を頭、胴体、腰、脚、腕などの各パートに分けて、それらがどのように動くのか、またその意味は何かを考察した。また Hanna は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で人類学を学び、ナイジェリアのイボ族でフィールドワークをし、1976 年ウバカラの舞踊に関する人類学研究でコロンビア大学の学位を取得している。Hanna はまた、1979 年、非言語コミュニケーションとしての舞踊論『To Dance is Human』を著した。コロンビア大学といえば、ボアスの系譜を想起させるが、Hanna は、ボアスにはない新しい観点から舞踊をとらえている。（詳細は後述する。）

さらに特筆すべき研究に、1968 年 Lomax and Bartenieff によって行われた舞踊計量学（choreometrics）プロジェクトがある。この研究は、ザックスが行った地域研究の延長線上にあるが、より精密でシステムティックな地域研究と位置づけられる。このプロジェクトは、計量音楽学（cantometrics）の方法を基礎にしたもので、まず経済的・社会的にみて対照的な世界を代表するアメリカ先住民、オーストラリア、アフリカ、などの 7 地域を抽出し、その社会文化で踊られている舞踊と日常動作を撮影した 200 の映像フィルムをもとに分析を行った。舞踊の動きは、日常動作の中でよくみられるパターンを様式化したものであり、舞踊と労働は集団の組織化と相互作用を写し出しているとされる。大きな問題点として、文化を代表しうる研究サンプルをどのように抽出するのかが問われるが、分析手順を明確にしながらグローバルな視点で舞踊の比較をしていることは評

価される。

3.2 ヨーロッパの舞踊人類学

アメリカの人類学の対象が、主にアメリカ先住民だったの対し、イギリスの人類学の対象は、主にイギリス以外の国土、具体的には植民地だった。

たとえば、ナイジェリアのイフェ大学で長年にわたり教鞭をとっていた Harper (1969, 70, 72) は、日常動作や舞踊特性を詳細に分析しながら、舞踊の機能主義的意味について検討している。Harper は、70 年代後半イギリスへ帰国するが、その後ナイジェリア人研究者 Ajaye (Ajaye and 遠藤保子, 1983) が、研究を引き継ぎ発展させている。

特に 70 年代以降、イギリスの舞踊研究者は社会学者と協力してさまざまなセミナーや研究会を開催している。たとえば、1979 年、ロンドン大学オリエント・アフリカ研究所で学際的セミナーが開催され、後述する『社会と舞踊』(Spencer, 1985) という著作に結びつき、また 1982 年には、社会学・人類学に関する初めてのイギリス舞踊学会議が開催された。イギリスの舞踊人類学は、著名な音楽学者であるブラッキング John Blacking (ベルファスト、クイーンズ大学) によって確立されたといわれる (Grau, 1993)。ブラッキングによれば、舞踊人類学は社会人類学のブランチと位置づけられ、舞踊人類学では次の 2 点が検討されねばならないという：1 つは、通文化的に舞踊の本質を理解することとボディムーブメントから導きだされる舞踊学を発展させること。2 つは、舞踊の象徴性と非言語コミュニケーションに関する人類学アプローチである。晩年のブラッキングは、インフォーマントと分析者との間の弁証法的な舞踊人類学の必要性を強調している。

さて、ドイツの特筆すべき収集・研究として、1952 年、科学映画による百科事典的な集大成をめざした科学研究・大学教材用映像資料の国際収集運動、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカがある。これは、映像でなければ説明が困難な事象や急速に消滅する危険性のあるものに関し

て生物学、民族学、人間行動学関係の基礎的映像を製作・収集し、16 mm フィルムやビデオコピーの形で研究者の執筆した付属論文をあわせて公開するものである。それらをもとに、Günther (1969) が、アフリカの舞踊と音楽に関する様式分析を行っている。彼は、動く映像でしか理解することのできない舞踊動作を詳細に分析し、アフリカの舞踊特性は、ポリセントリックとマルチプリケーション、それを可能にする身体の技術としてのアイソレーションである、としている。これは、アフリカの舞踊とジャズダンスとのかかわりを検討するのに有効である。

さらに、ハンガリーとエチオピア政府の要請によって調査・研究を行ったハンガリーの Vadasz は、エチオピアの舞踊と音楽を初めてシステムティックに映像化し、それをもとにエチオピアの舞踊特性を詳細に分析・記述している (Vadasz, 1970, 71, 73)。この研究は、システムティックな映像化とギュンターと同様な舞踊特性分析ということから、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカの延長上にあると考えられる。

4. 展開期の舞踊人類学研究

展開期とは、具体的には70年代くらいから現在までをさしている。この時期は、ポスト構造主義の時代といわれ、アメリカのギアーツ Clifford Geertz の解釈人類学やイギリスのターナー Victor W. Turner の儀礼研究など新しい考え方が展開され、さまざまな価値が多分化してきている。

ギアーツは、調査活動の前提となる「客観性」を問題にし、調査者の主観や調査者と現地人との相関関係などの可変的な要素を考慮し、社会の理解に有意義であると認めた特定の象徴群の意味解釈に専念する、という解釈学的な人類学を主張している。ギアーツが、アメリカの人類学に強い影響を与えた理由は、民族誌的解釈という過程に、他の目的に従属しない自立的意義を与えたことである (関本照夫, 1988 p. 284)。ギアーツの「厚い記述」を参考に、Sklar (1991) は、メキシコの祭を事例としながら舞踊民族誌について論じている。

ターナーは、中央アフリカのンデンプ族を初めとするフィールドワークから有名な『儀礼の過程—構造と反構造—』を著している。「反構造」というのは、構造のアンチテーゼで、静態的な社会観を超えようとする概念である。つまり、彼は、ファン・ヘネップ A. van Gennep の通過儀礼の3段階区分、分離—周辺—再統合あるいは、境界以前—境界状況—境界以後の区分をふまえて、第2段階の周辺あるいは境界状況 (リミナリティ) にみられる人間の相互関係の様式に着目し、それをコムニタスと称した。コムニタスとは、身分秩序や性別、階級組織など、構造の次元を超えたあるいは捨てた反構造の次元における自由と平等な人間相互の関係である。そして、社会はひとつの事物ではなく構造とコムニタスという段階をとまなう弁証法的過程であるとした (ターナー, 1976)。前述した Hanna は、ターナーの立場から舞踊を分析している。Hanna は、ウバカラの舞踊に表現されている5つの世界観の原則を検討し、次にこの世界観におけるパラドックスを照らし合わせ、ウバカラの舞踊は、このパラドックスを解消し、男性対女性などのあい対立する関係の、微妙なバランスを維持するのに役立つと論じている。Hanna の研究の新しさは、舞踊は社会における対立するものを表現するととらえる点にある。Hanna は、ウバカラの世界観は、ダイナミックなプロセスとしてとらえたターナーの社会的世界観と一致するとし、それまでの静態的な社会ではなく、動態的な社会の中での舞踊を考察したのである。この意味において Hanna は、舞踊人類学の新たな展開に寄与したと考えられる。

Spencer は、コムニタスと反構造の考え方を援用しながら、前述の『社会と舞踊』でカタルシスとしての舞踊、社会的機能としての舞踊、そして儀礼ドラマとしての舞踊などの7項目から考察している。それによると、踊ることによって構造化された日常から解放され、境界領域をつくるが、結果的にはそれまでの階級組織に従わせる役割を補う役割をはたしているという。

5. お わ り に

最後に、日本における舞踊人類学の研究動向を簡単に記述したい。1979年、舞踊評論家の上林澄雄が、アメリカの舞踊人類学研究を紹介し、1982年、精神科医であり舞踊研究者でもあった石福恒雄が、舞踊人類学の研究動向を簡潔に概観している。石福は、今世紀初頭の欧米の人類学者が行った研究に端を発する舞踊の人類学は、1950年代以降舞踊が人類学の正当な研究テーマになり、60年代に研究のルールがしかれ、70年代には活発な研究が行われている、と考察している。石福の指摘を待つまでもなく、日本の舞踊人類学研究は、欧米の研究に触発されて展開されてきたが、今日では、アジアやアフリカにおけるフィールドワークや現地研究者との共同研究を通して、欧米の研究者からは発想しえない研究が輩出されてきている。例えば、アジアに関しては、早稲田大学の宮尾慈良（1984, 94）が、アジアのフィールドワークをもとに舞踊や演劇と宇宙の神秘性などのかかわりを論じ、高知大学の太谷紀美子（1984）が、インドの舞踊特性と習得法を考察している。さらに、音楽学者の藤井知昭は、『音と映像による世界民族音楽大系Ⅰ, Ⅱ』（1988年）、『音と映像による新世界民族音楽大系Ⅰ, Ⅱ』（1995年）というVHDビデオデスクとビデオテープによる民族音楽大系を監修し、中京大学の鈴木道子（1996）が、身体論を中心とした舞踊人類学論を展開し、お茶の水女子大学の本田郁子らが、バリ島のフィールド・ワークをもとに深化した研究を行っている。アフリカに関しては筆者が、ナイジェリアやエチオピアでのフィールド・ワークをもとに舞踊の意味や特性を分析し、舞踊人類学の研究動向を論じ（遠藤保子, 1984a, 84b, 85, 89, 90, 91）、京都文教大学の松田凡（1992）が、エチオピアでフィールドワークを行い、動態的な社会での舞踊を分析している。

また、舞踊の研究を阻害していたのは記譜法がないからだといわれてきたが、前述したようにラバノーテーションやグラフノーテーションなどの記譜法は確立されてきている。しかし、採譜に時

間がかかったり、解読がむずかしいなどの課題が多く、音符のように一般的に利用されていない。しかし、立命館大学の八村広三郎（1997, 98）らによってコンピュータでラバノーテーションを解読する研究も行われたしている。

こうした研究動向をふまえると、これからの舞踊人類学研究は、日常行動の一環として、自己を身体で表現することをも含めた、広義の意味での舞踊に関する人類学研究になるだろうし、その研究方法は、より一層学際的な広がりのある研究になるだろう。さらに近い将来、コンピュータによる舞踊の採譜や解読がもっと容易になり、コンピュータによる3次元再現・解析が可能になることが期待される。

注

1. 日本において舞踊人類学という言葉は、これまであまり一般的な表現ではなかった。1985年、第20回舞踊学会で筆者が、舞踊人類学の研究発表を行った際に、「舞踊人類学という日本語があるのか」という質疑が提出された程である。それが近年、舞踊人類学をタイトルにした論文も多くなり、徐々に市民権を獲得しはじめている。
2. 1970年代以降注目されたカルチュラル・スタディーズは、単なる文化研究ではなく、芸術や文学などの狭義の文化領域とともに生活様式などの広義の文化領域も扱い、最近ではジェンダーやエスニシティなどの領域も扱うなど、広範な文化領域を取り扱っている。が、共通しているのは、文化を権力と社会とのかかわりでとらえることである（佐藤毅, 1997）。アメリカではカルチュラル・スタディーズの視点から舞踊がとらえなおされ（Desmond, 1997, pp. 29-54）、舞踊研究に新たなアプローチが展開されている。

文 献

- Alaye, F. and 遠藤保子（1983）身体とリズムのコミュニケーション。エジプト・アフリカー世界の国シリーズ。講談社：東京, pp. 132-143.
- Desmond, J. (1997) Meaning in motion—new cultural studies of dance—Duke Univ. Press: Durham and London.
- 遠藤保子（1984a）タムタム・イン・ヨルバーブラックアフリカの村に住んで—。講談社：東京。
- 遠藤保子（1984b）ヨルバにおける舞踊—オヤンのオグ

- ン祭りを事例として一. 舞踊学 7: 12-20.
- 遠藤保子 (1985) ナイジェリアに関する舞踊人類学の動向—60~70年代を中心に一. 舞踊学 8: 52-53.
- 遠藤保子 (1989) アフリカに関する舞踊人類学の研究動向. 舞踊学 12: 44-46.
- 遠藤保子 (1990) ヨルバ族の女性と音楽. 藤井知昭監修民族音楽叢書 2 女性と音楽. 東京書籍: 東京, pp. 300-312.
- 遠藤保子 (1991) 民族と舞踊. 舞踊教育研究会編舞踊学講義. 大修館書店: 東京, pp. 22-31.
- 藤井知昭監修 (1988) 音と映像による世界民族音楽大系 I, II. 平凡社・日本ビクター: 東京.
- 藤井知昭監修 (1995) 音と映像による新世界民族音楽大系 I, II. 平凡社・日本ビクター: 東京.
- 船曳健夫 (1988) 文化と社会. 伊藤幹治・米山俊直編文化人類学へのアプローチ. ミネルヴァ書房: 京都, pp. 18-29.
- Grau, A. (1993) John Blacking and the development of dance anthropology in the United Kingdom. *Dance Research Journal* 25(2): 21-31.
- Günther, H. (1969) Grundphänomene und Grundbegriffe des Afrikanischen und Afro-amerikanischen Tanzes. Universal Edition: Graz.
- Hanna, J. L. (1976) The anthropology of dance ritual: Nigeria's Ubakala Nkwa di Iche Iche. Ph.D. diss., Columbia Univ., New York.
- Hanna, J. L. (1979) To dance is human: A theory of nonverbal communication. Univ. of Texas Press: Austin.
- Harper, P. (1969) Dance in Nigeria. *Ethnomusicology* Vol. XIII No. 2: 280-295.
- Harper, P. (1970) The role of dance in the Gelede ceremonies of the village of Ijio. *ODU A Journal of West African Studies-New Series* No. 4: 67-94. Univ. of Ife Press Oxford Univ. Press: Ibadan.
- Harper, P. (1972) The Kambari people and their dances. *ODU-A Journal of West African Studies*—No. 8 Series No. 7: 83-96. Univ. of Ife Press Oxford Univ. Press: Ibadan.
- 八村広三郎ほか (1997) 動作生成ライブラリを利用した身体運動の記述と表示. *人文科学とコンピュータ* 36(10): 55-60.
- 八村広三郎ほか (1998) 舞踊譜 Labanotation に基づく身体運動の処理—譜面読取り Laban Reader と譜面エディタ Laban Editor—. *人文科学とコンピュータ* 38(6): 61-68.
- 石福恒雄 (1982) 舞踊の人類学—展望と試論—. 舞踊学 5: 40-41.
- Kaeppler, A. L. (1967) The structure of Tongan dance. Ph.D. diss., Univ. of Hawaii.
- 上林澄雄 (1979) 舞踊学の動向—理論体系と科学的客観性との総合—. 舞踊学 2: 29-31.
- Kealiinohomoku, J. (1967) Hopi and Polynesian dance—A study in cross-cultural comparisons—. *Ethnomusicology* 11: 343-358.
- Kealiinohomoku, J. (1976a) A comparative study of dance as a constellation of motor behaviors among African and United States Negros. *Refractions and Perspectives in Two Anthropological Studies of Dance* CORD Res. Ann. 7: 1-179.
- Kealiinohomoku, J. (1976b) Theory and methods for an anthropological study of dance. Ph.D., diss., Indiana Univ.
- Kealiinohomoku, J. (1983) An Anthropologist Looks at Ballet as a Form of Ethnic Dance. In: Roger C. and Marshall C. (Eds.) *What is Dance?*, New York, pp. 533-549.
- Kealiinohomoku, J. (1998) Kurath, Gertrude Prokosch. In: Cohen, S. J. (Ed.) *International Encyclopedia of Dance* Vol. 4. Oxford Univ. Press: New York, p. 77.
- Kurath, G. P. (1960) Panorama of dance ethnology. *Current Anthropology* 1(3): 233-254.
- Lomax, A. and Bartenieff, I. (1968) Dance style and culture. *American Association for the Advancement of Science*, pp. 222-247.
- 松田 凡 (1992) 採集民コエグの歌とダンス—エチオピア西南部, オモ川下流平原の民族間関係—. *国立民族学博物館研究報告* 17(1): 36-96.
- 宮尾慈良 (1984) アジア舞踊の人類学. パルコ出版: 東京.
- 宮尾慈良 (1994) アジア演劇人類学の世界. 三一書房: 東京.
- 村武精一 (1991) 文化人類学の特質と視角. 村武精一・佐々木宏幹編文化人類学. 有斐閣: 東京, p. 8.
- Novack, C. J. (1989) Sharing the dance—contact improvisation and American culture—. The Univ. of Wisconsin Press: Wisconsin.
- 大谷紀美子 (1984) インド古典舞踊の伝承と学習. 川田順造・徳丸吉彦編口頭伝承の比較研究 1. 弘文堂: 東京, pp. 195-223.
- Quigley, C. (1998) Ethnology. Cohen, S. J. (Ed.) In *International Encyclopedia of Dance* Vol. 4 Oxford Univ. Press: New York, p. 372.
- Royce, A. P. (1977) The anthropology of dance. Indiana Univ. Press: Bloomington.
- ザックス: 小倉重夫訳 (1972) 世界舞踊史. 音楽之友

- 社：東京。
- 佐藤 毅 (1997) 日本におけるカルチュラル・スタディーズの現状と課題. 立命館大学産業社会学会立命館産業社会論集 33(2): 123-135.
- Sklar, D. (1991) On dance ethnography. *Dance Research Journal* 23/1: 6-10.
- Spencer, P. (1985) *Society and the dance*. Cambridge Univ. Press: Cambridge, pp. 1-46.
- 鈴木道子 (1996) 〈舞踊人類学〉からの視点. 藤井知昭 監修民博「音楽」共同研究編「音」のフィールドワーク. 東京書籍, 東京, pp. 376-389.
- ターナー：富蔵光雄訳 (1976) 儀礼の過程. 新思想社, 東京. 〈Turner, V. (1969) *The ritual process: Structure and anti-structure*— Chicago: Aldine.〉
- Vadasy, T. (1970) Ethiopian folk-dance. *Journal of Ethiopian Studies* 8(2): 119-146.
- Vadasy, T. (1971) Ethiopian folk-dance II: Tegra and Gurage. *Journal of Ethiopian Studies* 9(2): 191-217.
- Vadasy, T. (1973) Ethiopian folk-dance III: Wallo and Galla. *Journal of Ethiopian Studies* 11(1): 213-231.
- 米山俊直 (1988) 文化人類学とは何か. 伊藤幹治・米山俊直編文化人類学へのアプローチ. ミネルヴァ書房, 京都, p. 15.
- Youngerman S. (1998) Anthropology. In Cohen, S. J. (Ed.) *International Encyclopedia of Dance Vol. 4* Oxford Univ. Press: New York, p. 369.

(平成11年 6 月18日受付)
(平成11年 7 月21日受理)